●〈症例〉

若年者に発生した
盲腸腺扁平上皮癌の1例

草野昌男 小島康弘 飯塚邦夫 近藤史帆
渡辺 崇 島田憲宏 境 吉孝 大楽尚弘
小島敏明 池谷伸一 樋渡信夫

いわき市立総合磐城共立病院／消化器科
〔Key Words〕盲腸腺扁平上皮癌, 若年者

和文要旨

症例は28歳, 男性。平成17年3月上旬より右側腹部痛, 下旬より右下腹部に腫瘤を触知し当院を受診。腫瘤は手拳大で可動性があり, 通過障害がなく, CTでは造影効果に富み, Gaシンチで強い集積が認められたため悪性リンパ腫を疑った。大腸内視鏡検査では8cmの盲腸腫瘍で肛門側はGroup 4, 腺癌疑い, 口側はGroup 5, 扁平上皮癌であった。回盲部切除術を行い盲腸腺扁平上皮癌と診断した。若年者の腺扁平上皮癌は稀であり報告する。

はじめに

腺扁平上皮癌は, 同一の癌に腺癌と扁平上皮癌の混在した稀な腫瘍である。今回我々は若年者に発生した盲腸腺扁平上皮癌の1例を経験したので報告する。

症 例

患者: 28歳, 男性。

主訴: 右側腹部痛, 腫瘤触知。

家族歴: 祖父, 父が大腸癌。

既往歴: 特記すべきことなし。

現病歴: 平成17年2月の検診で白血球数高値を指摘され, 近医を受診。3月上旬より右側腹部痛, 下旬より右下腹部に腫瘤を触知したため当院を受診した。

入院時現症: 身長182.5cm, 体重80kg, 血圧124/78mmHg, 眼瞼結膜貧血なし。右下腹部に手拳大, 可動性良好, 圧痛のない腫瘤を触知した。

入院時検査成績 (Table 1): 血算では白血球数の増加, 生化学検査では胆道系酵素, CRPの軽度上昇がみられた。各種腫瘍マーカーは基準値内であった。

腹部CT検査 (Fig. 1): 造影早期に比較的造影される85×65×50mmの腫瘤が認められた。

下部消化管内視鏡検査: 肛門側は発赤調の粗大顆粒

Table 1 Laboratory data on admission.

入院時検査所見			
〈Hematology〉		TP	7.1 g/dl
WBC	15600 /μl	Alb	4.1 g/dl
RBC	483 ×10 ⁴ /μl	BUN	19.5 mg/dl
Hb	13.5 g/dl	Cr	1.0 mg/dl
Plt	37.2 ×10 ⁴ /μl	TC	151 mg/dl
〈Blood chemistry〉		TG	73 mg/dl
T-Bil	0.4 mg/dl	CRP	3.82 mg/dl
D-Bil	0.2 mg/dl	〈Tumor marker〉	
AST	18 IU/l	CEA	1.3 ng/ml
ALT	30 IU/l	CA19-9	8 U/ml
LDH	177 IU/l	SCC	1.0 ng/ml
ALP	516 IU/l	CYFRA	0.4 ng/ml
γ-GTP	195 IU/l	sIL2-R	408 U/ml

状隆起が集簇した腫瘤で, 生検時には非常に脆く易出血性であった (Color 1)。スコープを口側に進めると, やや褪色调となり, 生検時には硬かった (Color 2)。

腫瘤の大きさのわりには通過障害がなく, CTでの造影効果に富み, Gaシンチで非常に強い集積が認められたことから, 当初悪性リンパ腫を疑った。しかし, 生検の結果, 口側は扁平上皮癌, 肛門側は管状腺癌の疑いであり, 腺扁平上皮癌と術前診断し外科転科, 回盲部切除術を行った。

切除標本肉眼所見 (Fig. 2-a, b): 盲腸に100×80mmの2型腫瘍が認められた。ホルマリン固定後の断面は肛門側の一部のみが茶褐色でほとんどが白色調であった。

病理組織学的所見 (Fig. 3-a, b, c): 肉眼的に茶褐色部は腺癌, 白色部は扁平上皮癌で移行部がみられた。腺癌部は粘液を多く有しており, 扁平上皮癌部は角化を伴いssまで浸潤していた。最終診断はasc, ss, ly1, v0, n0, ow(-), aw(-), ew(-), stage IIであった。

術後再発なく順調に経過中である。

考 察

盲腸腺扁平上皮癌の報告は, 2004年に我々が報告¹⁾して以来, 4例の報告があり本例は25例目であった。性別は男性11例, 女性14例, 年齢は28~81歳, 平均64歳で本例は過去最年少であった。腫瘍肉眼型は2型(62.5%)が多く, 腫瘍径は2.5~11cmで平均8.4cmと大きいものが多かった。

大腸における腺扁平上皮癌の発生頻度は, 0.05~0.17%と報告され²⁾, 比較的稀である。当院で1995~2005年の11年間に手術検体で組織学的に検討できた886症例923病変において, 腺扁平上皮癌は本例を含め

Fig. 1 Computed tomography showing hypervascular tumor of the cecum.

Fig. 2 Macroscopic specimen showing type 2 cecal tumor, measuring 100×80mm in size(a). Cut surface of the resected specimen. The oral side of the tumor is whitish and anal side is brownish(b).

3例で、発生頻度は0.33%であった。性別は男性2例、女性1例、年齢は28～71歳、腫瘍肉眼型は2型が3例、腫瘍最大径は2.5～10cmであった。また、39歳以下の若年者は886症例中17例で2親等内に癌がある患者は17例中6例、3親等内までには9例であり、遺伝の関与が疑われた。本例も父および父方祖父が大腸癌であり、遺伝子検索は行っていないがHNPCCの可能性も示唆された。

若年者に発生した貴重な盲腸腺扁平上皮癌の1例を報告した。

文 献

- 1) 草野昌男, 森菜緒子, 堤康一郎, 他: 盲腸に発生した腺扁平上皮癌の1例. Prog Dig Endosc, 64: 128—129, 2004.
- 2) 土屋泰夫, 中村利夫, 梅原靖彦, 他: 大腸腺扁平上皮癌の1例. 日臨外医会誌, 58: 1829—1832, 1997.

〈カラーは8頁に掲載〉

Fig. 3 Histological findings of the cecal cancer shows adenosquamous carcinoma(a), areas of adenocarcinoma with mucus(b), areas of squamous cell carcinoma characterized by intracellular keratinization was demonstrated(c).

A case of juvenile cecal adenosquamous carcinoma.

Masao Kusano	Yasuhiro Kojima
Kunio Iizuka	Shiho Kondou
Takashi Watanabe	Norihiro Shimada
Yoshitaka Sakai	Naohiro Dairaku
Toshiaki Ojima	Shinichi Ikeya
Nobuo Hiwatashi	

Department of Gastro-Enterology, Iwaki Kyoritsu General Hospital.